

Goshin Moro

Supporters Club

News Letter

05

茂呂剛伸後援会 会報

2017/01





撮影：小林幸王(レザボアプロダクション)

岩橋英遠『道産子追憶之巻』×djemp



2016年11月、茂呂剛伸は二つの舞台で、共に北海道の歴史を語りかける作品とのコラボレーションを果たしました。北海道立近代美術館所蔵の名品、岩橋英遠さんの『道産子追憶之巻』を背景に、同作へのオマージュを込めた楽曲をピアニストのhajimeさんとのユニット・djemp(ジャンピ)で公開制作。5日間の連続公演を行いました。そして、CAI02(シーエーアイ ゼロツー)では北海道の風景の中に歴史の水脈、文脈を捉え続ける写真家・露口啓二さんの作品とともに10日間の全会期に毎夜、茂呂と門下メンバーによるライブを開催する二人展を行いました。茂呂は今年も北海道の歴史に寄り添い、掘り起こし、結び合う活動に積極果敢に取り組んでまいります。



露口啓二×茂呂剛伸・縄文太鼓



本田優子さん

札幌大学副学長
(一社)ウレシパクラブ 代表理事

×
茂呂剛伸

インタビュー vol.5

この大地で同じ未来を見つけない

司会・撮影・構成 ウリュウ ユウキ

「我々の根っこ」が ここにある

・・・本田さんは2010年に「ウレシパ・プロジェクト」を立ち上げられ、研究者としてだけではなく学外の方々とも繋がり合いながら、アイヌ語のウレシパの意味する”育て合う”ことを軸にした活動を継続され、茂呂さんもアイヌ文化や縄文文化に光を当て、そこにアフリカで学んでこられたジャンベ…異文化との融合を「縄文太鼓」として表現されています。最近ではウレシパクラブの会員でもある川上さやかさんと共演もされています。

現在の北海道に続く一筋の流れの上にあるアイヌ文化、縄文文化との出会い、そして今どのように関わり活動しておられるのかについて、まずお聞かせ下さい。

茂呂剛伸 札幌大学名誉教授の原子修(はらこ・おさむ)先生との出会いが今日に繋がっていることを、大変嬉しく思います。原子先生とは札幌ACF(アートカルチャーフォーラム)で出会って以来7~8年が経ちますが、その中で演奏を聴いていただく機会に恵まれました。その後楽屋で「あなたのジャンベの音は縄文の音だ!」と仰っていただき、いきなりの言葉のプレゼントに撃ち抜かれました。自分の中でワクワクするとともに「どうして?」とも思うところがたくさんあって、それ以来学びを先生に求め、ご自宅で4時間、5時間といろいろなお話をさせていただきました。私も北海道のこと、文化のこと…先生の仰るすべてを知りたいと思い、その機会に恵まれて、私は「原子先生が詩を通して縄文/続縄文の文化を表現してこられたのだから、まさにそういう

ことなのだろう。北海道から発信すべきことは『縄文』だ!」と感化され、スイッチが入りました。”縄文人”である原子先生との出会いがその第一歩です。

本田優子さん 私は平取町二風谷(にぶたに)というアイヌの村に1983年から1994年まで暮らし、その後札幌に出てきて北海道立アイヌ民族文化研究センター(現・北海道博物館)に非常勤で勤めながら論文を書いていました。その頃アイヌと縄文の関係性は今のようにはっきり見えていなかったのです。アイヌ文化の前の擦文文化、擦文人とアイヌが繋がっていたということすら言えない状態が長かったのです。ましてやアイヌが縄文人の末裔だと言うことはある種のタブーでした。縄文からいわゆる「アイヌ文化期」と呼ばれる時代まで、人間集団の大きな移動があったとは考えられないので、ヒトとして繋がっていると考える方が自然ですよ。何を怯えることがあるんだろう、と。アイヌの人々が縄文人のDNAを受け継いでいることは、最近では学問的にも実証されてきています。

私は学生達に「縄文が我々の根っこである」と言っています。例えば大木を見て神様が宿っていると感じるような感性は”縄文的な感覚”だと言われており、我々の一番根っこの世界観を形成しているのですけど、ただ、その一番深いところまで辿っていけないんですよ。私は金沢の出身なので弥生ど真ん中ですが、アイヌ文化を学んでいるとすごく心地いいんです。人としてどう生きていくのか、人間社会は本来どうあるべきかということを考えるようになります。それはおそらく私の一番深いところにある縄文的な心性が共鳴するんですね。アイヌ文化を学ぶことで私の中でしっかりと

縄文とアイヌが結びついたことがとても幸せだったなと思います。日本人全体がアイヌ文化を学ぶことによって自らの根っこを確認できるのだと思います。

茂呂 さらっと「10年程二風谷に…」と仰いましたが、なかなかその判断は…。受け入れてもらえるのかという判断も含めて。

本田 一年だけ居候させて下さいと、恩師である萱野茂先生にお手紙を書きました。私は日本史を専攻していたので、近代のアイヌ政策について卒論を書いたのですが、今のアイヌの人たちのことがさっぱりわかっていない。それでお願いしたところ、いいよいよ、いらっしゃいと。私は今その頃の先生の年齢になりましたが、自分の身になったら、よくもこの馬の骨ともわからない女の子を受け入れて下さったなと思います。

茂呂 感じるものがあつたんですね。未来が見えていたのでしょうかね。

本田 本当にありがたい限りで。そして、日本で初めてのアイヌ語塾の創設に関わらせていただきました。一年で帰るつもりだったのが、先生がご病気になられて。この歴史的な塾を潰すわけにはいかないと、ノートを持って苫小牧の病院に通ってアイヌ語を教えていただきました。それを子ども達に教えるうちにすっかり「これは楽しい、大学院で学ぶよりはるかに私に合っている」と思って、結局11年暮らしました。

茂呂 萱野先生はまだ国会議員にはなられていないで…

本田 1994年のことでした。それは私が二風谷を離れた年だったんですね。

茂呂 萱野先生が残された功績はどこにあるとお考えですか。

本田 先生はアイヌの問題が福祉の問題だと思われていた時代に、そうではない、文化の問題だということを明確に主張されてきました。アイヌ文化は1970年代半ばにはかなり厳しい状況に置かれていました。アイヌにシンパシーを感じている人達がそれを口に出せない状況でした。ところが1977年、「アイヌ文化は今の文明の危機を救う新しい思想である」という趣旨の記事を朝日新聞の本多勝一さんと北海道新聞の北洞孝雄(きたぼら・たかお)さんという二人のジャーナリストがわずか2日違いで掲載しました。地球はこのままでは立ちかないとみんなが考え模索し始めた時に、自然との関係性をずっと持ち続けてきた北海道のアイヌ文化、思想に今こそ私達は学ぶべきだという潮流が出てきたのです。それを淡々とやってこられたのが先生だった。時代の空気が先生にスポットライトを当てたと私は思います。先生がずっとアイヌ文化の素晴らしさを訴え続けてこられたところに時代が追いついたと。一生に何十冊の書物と山ほどの講演活動を残され、アイヌ文化というものは本当に素敵だと世に広く知らしめたのです。先生には安心感があるように思います。まだアイヌに対してデリケートになっていた人々に対して、その文化に注目するきっかけを作られた先駆者の一人が、先生だと思えます。

茂呂 1978年に江別で生まれた私は、親の世代からの空気のようにアイヌ文化に負の部分のイメージを感じたのだと思います。他を認め合って共に生きる精神に原子先生からの教えを通して気づき、アイヌ文化、縄文文化を発信することによって、まもなく北海道命名150年を迎える今、このふるさとから同じ未来を見ていきたいと思っています。本田先生のおかげで、現代のアイヌ文化の伝承者として川上さんとの出会いをいただき、まず素晴らしい表現者だなと思いました。そこからお互いの考え方を話し、一緒に作って文化を重ねていこう、次の世界に残し伝えるものを、と。それには、過去を知らずに未来の話をしてもらえないと思っています。過去を知り、但し囚われることなく、何を選択して前に向かうのかを共に発信していきたいと思っています。白老町に国立アイヌ民族博物館・民族共生象徴空間(仮称)が立ち上がる2020年度に向け、アイヌ文化が大きな変革期を迎えると思います。川上さんやウレシバクラブの皆さんとおつきあいさせていただく中で、アイヌ文化にも各地域によって個性があると伺いました。白老に象徴ができることでそこだけがアイヌ文化(の全体像)と思われることも危惧されている方もいらっしゃると思います。各地域の個性

が残っていくことがアイヌ文化の厚みを増すことに繋がると感じています。

本田 象徴空間は今が山場です。年間100万人の集客を目指していますが、規模が大きくなることで若者達がアイヌ文化で生きていくための場が提供されることは本当にありがたいと思っています。最も大切なことは、象徴空間が文化伝承と人材育成のセンター的な役割を果たすことです。若者たちだけでなく、小さな子どもたちも、そこでアイヌ語やアイヌの世界観に包まれて育っていくような場になれば素晴らしいと思います。2020年の夏前、東京五輪・パラリンピックの前には確実にオープンになると思います。大きな契機になりますね。



超える、心を揺らす それが表現者の力

茂呂 川上さんのおつきあいの中で、現在白老ではアイヌ文化の伝承に関するプログラムがあるとお聞きしました。

本田 「担い手育成事業」ですね。素晴らしい若者たちが育っています。

茂呂 川上さんは知って喜んでいただく音楽、そして伝統を守る音楽の両方を大切にしたいと思っておられて、そのバランスが今整っていると感じています。

本田 私も芸能、芸術はとても大事だと感じていて、象徴空間ではどのようなステージを作るのか今から本気で考えるべきでしょうね。いろいろな方法がありますが、最終的に本当に満足してもらえるのはアイヌの伝統的な歌唱法だと私は思っています。それで川上さんのような力を持った若手がたくさん育たないと思っています。そして、踊りはもうちょっとアレンジしてエンタテインメントの要素も入れた方がいいように思います。そこに聴く人々が本当にびっくりする伝統的歌唱法をうまく結びつけるには天才的な力量が必要です。それをやった時に、アイヌの芸能は次のステージに向かえるような気がしています。

私はウレシバクラブの学生達に「まずはちゃんと勉強を」と言っていますが、芸能もものすごく大事だと思っています。学生たちも週2回の学習会の前に必ず踊りの練

習を入れています。芸能はアイデンティティの拠り所になっているわけでもあり、これからのアイヌの芸能を考えるにあたって、アレンジを若者の手でどんどんやっていいと思うのです。2017年の「ウレシバフェスタ」では、なにか一つの演目でもチャレンジできればと思っています。

茂呂 歌、踊りで伝えられるものは言葉を軽く超えてしまいます。その力で私は海外で「言葉を超えて認め合う」時間を経た後で“なんてスムーズにコミュニケーションが取れるんだろう!”という経験をして、表現の持つ力の物凄さを感じます。高い意識を持っていないと受け取られ方も変わってしまうのです。

本田 アイヌの芸能にはまだ圧倒的にプロが少ないです。

茂呂 川上さんはまさにその一歩としてそういう姿を後輩に見せる。彼女は「泣きながらムックリを練習した」と言っていました。それも意識、自負なんですよ。

本田 そういう若者達をいっぱい育てたいと思います。「役割なくして天から降ろされたものは一つもない」という精神で、自分の役割を見つけて欲しいと学生達には言っています。また、言葉には民族の世界観が宿っているということも伝えていきます。アイヌ語は小さな言葉がいくつか集まって全く別の言葉になっている例がたくさんあるのですが、アイヌ語でいう“自分に対して自分の心を揺らす”という意味の言葉が“考える”という言葉になっています。それを知った時、脳みそでなく心を揺らすことが“考える”ということだと気づいて私は鳥肌が立ちました。因みに日本語の“考える”の語源は、辞書を引くと「彼向う(かむかう)、と。向こうに向かうことが日本語の“考える”の語源とすると、アイヌ語はきつと内に向かっていきます。方向が全く違う。でも、“心を揺らす”って本当だなあと。考えているようで右から左に抜けていくことも多い中で、心が揺れたら確実に考えますよね。だから本当に素敵な言葉だなあと。私は、本を読んだり論文を書くのが好きな学生は当然そこに向かって欲しいと思うけど、役割として人の心を揺らすことができるのもまた“才能”なんです。そこを伸ばして欲しいなあ、って。

茂呂 心を揺らす、か…素敵ですね。「感動」=感じて動くという言葉があります。私も演奏する時、涙を流す方達がいらした時に、何か自分の役割をいただいたと思える瞬間があります。表現者は外に出て、コミュニケーションの中で自分の役割に気づく瞬間が必要です。なので“練習のための練習”で自分自身の心が動かなくなってしまうないように、演奏や発信の機会をたく

さん作っていくこと、「演奏」=演じて奏でる瞬間に相手の心がどう動いてくるか、過去の経験とともに今そこで選択することで、演じる側の心が動いているか実践する以外に学ぶ術はないと思うのです。自分自身が気づくことで学びが加速していけば表現者として喜ばれる存在になれる…と、早い段階から気づいていけるのではないかと思います。



「私たちの文化」と みんなで思える時が来る

茂呂 アイヌ文化が今後どのように社会に影響を残し、そして伝統を守っていくのか、本田先生の活動のビジョンは何でしょうか。

本田 「北海道といえばアイヌ文化」!…アイヌ文化に触れたくて多くの方が北海道にお見えになる。景観や風土、食、素敵なものが山ほどあるその中の三本の柱の一つがアイヌ文化だ、というくらいになっていくと思います。私がなぜアイヌ文化に関わって生きてきたかという、北海道にとってアイヌ文化が鍵だと昔から思ってきたからです。1980年代、私が二風谷にいた頃は未だ差別が残り、アイヌ民族自身がアイヌであることが何なのかがわからないという時代でした。でも私自身はその当時から「北海道の核はアイヌ文化だ」と思っていました。それでもこんなに早くこういう時代が来るとは思っていませんでした。おそらくこれからあっという間にアイヌがプラスのイメージのみで受け止められるような社会になるでしょう。アイヌの若者たちが堂々とアイヌであることを誇りにして生きていける時代になったら、それは「北海道の誇り」になると思います。アイヌに限らず北海道民全てが、アイヌ文化は私たちが生きているこの土地が生み出した誇り高い文化、我々の土地の文化であると思えるような時代がきつきます。そこに何とか早くたどり着ければいいな、と思っています。

茂呂 やっと今いろいろなところでアイヌ文化…言葉も歌も音楽もデザインも…に触れる機会が増えてきて、そして“カッコいい”と受け止められるようになってきました。漫画『ゴールデンカムイ』に見られる

ように、ジャンルを超えてアイヌ文化に興味を持つ若者が増えてきたことは素晴らしいです。北海道に生まれた者が外に行った時に「アイヌ文化ってカッコいいでしょ?」と言えるような、「めんそーれ!」「アロハ!」のように、「イランカラナテ!」が言える瞬間がいつやってくるか、どんなブレイクスルーが必要か、私の中で考えています。

本田 アイヌ文化は北海道の大地が生み出した文化だという意識を私たちが持てたら、多分変わるのだと思います。バンクーバー空港に行くと、国内線にも国際線にも巨大な先住民族アートが設置され、私たちを出迎えてくれます。この、違う文化の土地に来た!という喜びを提供することこそが最大のおもてなしです。バンクーバーでも先住民族はマイノリティですが、マジョリティの人たちも先住民族とその文化は我々の誇りだという意識を持っていらっしゃるからこういうことができるのです。「我々の土地のアイヌ文化は素敵でしょ?」…北海道もそういう土地にしたいんです。きっとそうなります。

…2017年から地下鉄南北線さっぽろ駅のコンコースが改装され、そこにアイヌ文化を発信するコーナーが開設されると伺っています。地元の人々、そして全国・世界からのお客様を迎える場所に、展示内容のみならずデザインにも工夫が凝らされたこのような空間ができることは素晴らしいチャレンジだと思います。

茂呂 2020年に向けて、アイヌ文化を発信、支援する新たな枠組み(「民族共生象徴空間交流促進官民応援ネットワーク」)ができたという話を伺いました。

本田 行政、企業などがネットワークを組んで白老の象徴空間を盛り上げようとするものです。北洋銀行の横内龍三会長(茂呂剛伸後援会会長)が会長になりました。

茂呂 先日白老でムックリを買ってきたのですが、横内会長にも差し上げました。

本田 ぜひ何かの機会に川上さんと三人でステージにて!

茂呂 私も普段から持ち歩いていて、川上さんに手ほどきを受けています。信号待ちの時などにやっていると楽しいですよ!

本田 今度学生達にも「あなたたちもそれくらいやらないと!」って言います!(笑)

茂呂 このようにみんなを巻き込みながら楽しめるものがありますし、それらを最大限に活用しながら…というのは先生の仰る通りですね。

本田 二風谷に住み「平取アイヌ文化保存会」のお手伝いをしていた頃は本当に楽しくて。当時は小さな頃から歌と踊りの環境にいたおばあさん達がまだたくさんい

らっしゃいました。踊りの練習会といっても、本当に自分が楽しくて歌ったり踊ったり。私があんな土地で生きていこうと思ったきっかけはそれだったのかな、と思います。学生達にもそれを感覚として感じて欲しいと思っています。

茂呂 自分達での楽しさと、外に向かった表現。両方の楽しさがわかるといいですね。これからの世代の人たちに「これはすごい!カッコいい!」とガツンと思えるものに触れてもらえると変わっていきますよね。

本田 私はアイヌ民族に対する政策を、世界の先住民族政策並みに早く引き上げないと思っています。そのためには何が一番必要かという、アイヌ文化に私達の税金を投じて当たり前だと日本のマジョリティが思わないとダメなんです。アイヌ文化の圧倒的な素晴らしさを早く多くの国民に届けなければなりません。北海道の誇り、日本の誇りとして感じられるようになった時、初めて各国の先進的な政策のレベルに達することができます。そのためにはいろいろなところで若者たちが活躍して、マスとしてアイヌ文化が力を持たなければと思います。

茂呂 現代の文化との融合を図りながら発信しやすいようにしていくことも大切です。一つのエンタテインメントとして広めていくとともに、次代に伝えていくことを同時進行で進めていくのが大切です。

2017年もパリで演奏をしますが、いずれは川上さんたちとともに、国内だけでなく直接海外に繋がる活動をしていきたいです。そして、次に繋げるためにはもっと知りたくなるわけですから、学術に寄り添う活動もすごく大事なことだと思っています。ずっと続けていきますので、これからもご指導をよろしくお願いたします!



(2016/12/22

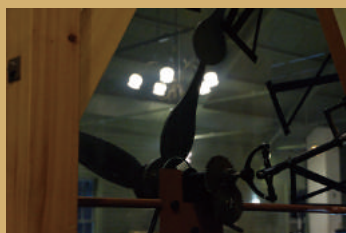
札幌大学(札幌・豊平区)にて)

時計台 ジルベスター コンサート 2016▶2017

Silvester Concert
Countdown Live 2016 to 2017
at Sapporo Clock Tower Hall



2016年から2017年へ、札幌のシンボル・時計台の年越しを彩るジルベスターコンサートの大役を3組・4人のアーティストで盛り上げさせていただきました。11月の北海道立近代美術館に次ぐ共演となるピアニストのhajimeさんと茂呂剛伸とのユニット・djemp(ジャンピ)、三味線奏者の菅野優斗さん、アイヌ伝統音楽の川上さやかさんが集い、昼、夕方、そして午前0時を挟んでの年越し公演の合計3ステージ。当日は時計台全体も無料開放され、地元のみならず国内外からお越しのお客さまと共に一年を締めくくり、そして時計台の鐘で新たな一年を迎える唯一無二の体験を共有させていただきました。ここでは年越し公演の様子を写真でお届けいたします。



開場前から時計台前には沢山のお客さまが。23時20分、祭太郎さんのMCに誘われてまずはdjempがオン・ステージ。グルーヴィーな音で幕開け!



さらに川上さんと菅野さんご登場。あっという間に時は過ぎ、祭さんの音頭と共に午前0時のカウントダウン。変わらぬ鐘の音が新年を告げます。



時計台ホールは一気に祝祭ムードに。4人のセッションに次いで縄文太鼓隊の新年叩き初め。新しい年を迎えた聴衆の心を揺らしていきます。



最後は全出演者揃い踏み、お客さまも踊り出して最高潮の盛り上がりの中フィナーレ。共に2017年を迎えてくださり、ありがとうございました!

師範



石田 しろ

師範代



山本 祥人

高野 麻美



きっかけは
太鼓を始めた
なんでしたか？

9年前、クリスマスディナーコンサートで初めて宗家・茂呂剛伸、そしてジャンベの演奏を聴きました。自然と体が動き「太鼓一つでこんなに豊かな音色が！しかも独奏で表現できるんだ！」と感動しました。それから5年、「何か楽器を、一人で出来る楽器ないかな？」と思ったその日の朝刊で道新文化センター講師の名前に茂呂剛伸を見つけ、試しにやってみようと思申しました。それが運命の出会いとなりました。

太鼓の魅力とは？

独演は自分を見つめ直し向き合い、太鼓を通して自己表現が出来、アンサンブルはまさに「みんなで叩くおもしろさ」で、太鼓の重なりからくる迫力、調和を考え自分の役割・協調性の中に生まれるその場限りの刹那的なグルーブがとても楽しく魅力です。老若男女問わず楽器経験の無い方でもすぐに楽しめ、シンプルだからこそその深みがあり、自分のよいと思う音を追求する終わりのない旅の様な楽しさがあります。

民族音楽や民俗芸能を見るのが好きで、何か楽器ができれば楽しそうだなと思っていたところ、偶然、道新文化センターのジャンベ講習の案内を見て、始めてみる事にしました。当時は、何か打楽器を習ってみようぐらいしか考えていませんでしたが、旅行先でジャンベのパフォーマンスを何度か見たことがあり、楽しそうな楽器だなとは思っていました。

叩き方や曲の構成などでさまざまな表現をすることが可能な楽器だと思います。考えながら演奏することで、自分の持っている技術力で最大限のパフォーマンスができ、人を楽しませることが出来る楽器ではないでしょうか。また、技量の差があっても、一緒に演奏すれば、みんなで楽しむ事が出来る楽器でもあります。先生の教え方がうまかった事もありますが、ジャンベを始めた日から演奏が楽しかった記憶があります。

職場である保育園で2年程前からジャンベを取り入れることになりました。ジャンベに触れたことが殆どなかった私でしたが、趣味でやっていたよさこいの曲の中にジャンベが取り入れられたのが茂呂先生との出会いでした。初めて生で茂呂先生はじめ流派の方々の演奏を聴いた時、心が揺さぶられました。聴いていてこんなに楽しくワクワクする演奏を聴いたのは初めてで、ぜひ自分も挑戦してみたいと思いました。

本物の木、ヤギ皮だからこそ出る繊細で心に響く音質は本当に素晴らしいです。又、太鼓の演奏は自分自身が心から元気になれる。悩みやストレスも吹き飛ばしていくほど太鼓を叩くと清々しい気持ちになれるんです。聴いてくれる方々にも元気や癒しを与えられる魔法の楽器です。そして音に自分の想いをのせることで、表現力、想像力が育まれます。音に囲まれる世界はとても心地よく幸せなひとときです。

あなたにとつての太鼓の活動、その現在と未来

ジャンベ・縄文太鼓 + 〇〇

ジャンベ・縄文太鼓+一生続けられる仕事
No djembe No life!



ジャンベ・縄文太鼓+北海道。昨年3月の北海道新幹線開業祝賀会で「北海道の土」と「エゾシカの革」を使用した北海道産の楽器という紹介を受け演奏させていただきました。演奏家はその土地の材料で自ら楽器を製作し、一人一人違った音のする楽器でアンサンブルを行う集団はあまりないのではないのでしょうか。この道産の楽器を使い、演奏活動という角度から、北海道の魅力をいろいろな場所で発信できればと考えています。

茂呂先生
って
どんな人？

人生に輝きを与えてくれた方。宗家・茂呂剛伸に出会えた事がどれだけ私の人生に楽しさ・刺激・喜び・たくさんの出会い・ステージを与えてくれた事か。出会いに感謝。

演奏はもちろん、人を引きつけるMCや演出のできる方です。縄文文化やアイヌ文化に精通しており、音楽を通じてなにかができるのか、ビジョンを持って行動しており、大きな発信力と影響力を持っている方でもあります。太鼓以外にもいろいろな事を勉強させていただいております。

最高の演奏ステージはどこですか？

月(宇宙)での演奏
2020年東京オリンピックでの演奏
三内丸山をはじめとする縄文遺跡での演奏



たくさんの人と楽しく演奏できるのもこの楽器の魅力だと思っていますので、100人、1,000人ジャンベを目標に、茂呂先生や仲間達と共に演奏と普及活動を行いたいと思います。子供達の前での演奏で自然発生的に手拍子が起こり、楽しい演奏だったとの感想をいただきました。老若男女問わず楽しめる演奏ができるよう、今後とも精進して行きたいと思っています。

ジャンベ・縄文太鼓+ダンス(よさこい・日本舞踊)…とても興味のある分野です。自分の音にのせて踊ってもらえることは一つの夢でもあります。私自身も踊ることが好きなので、踊って叩ける演奏家！目指したいです。
ジャンベ・縄文太鼓+子ども(レッスン、発表)…指導者としてもまだまだ力不足の私ですが、保育士をする中でたくさんの子どもたちに伝え未来の演奏家を発掘したいです。

音楽表現の神様。ジャンベ、演奏に注ぐ想いが濃く深く熱く、演奏会では過程や構成、一音一音まで考えられていて毎回勉強になります。信念を持って突き進む姿はとてもカッコよく、そして周りに伝えていくという姿勢全てを尊敬しています。

国内だけでなく海外での演奏。自分で構成、内容を考えた演奏を何千人もの観客の前で叩いてみたいですね。大歓声、たくさんの拍手。最後はスタンディングオーベーション！いつかそんな演奏者になれたらな…考えただけでもワクワクします！

年頭のご挨拶

新年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年は、大変名誉なことに3月26日に北海道新幹線開業祝賀会での奉祝演奏をさせて頂きました。また、7月16日にはフランスアヴィニオン演劇祭での初演奏をさせて頂きました。

そして、10月10日にはASEAN世界大会in札幌でもアイヌ伝統音楽と縄文太鼓のコラボレーションをさせて頂きました。

その他にも、8月5日～6日の二日間で札幌芸術の森開館30周年イベントで初の総合演出もさせて頂き、豊かな自然の中で、音で遊ぶ楽しさを参加者の皆さんと満喫致しました。

11月1日～5日までの5日間では、北海道立近代美術館にて名画「道産子追憶之巻」を題材にした公開作曲と演奏会を行うことが出来ました。

11月16日～26日までの10日間では、写真家 露口啓二氏と初の二人展をCAIO2で行うことが出来ました。会期中10日間は連続で演奏会を行う挑戦もお陰様で成功致しました。

年末、大晦日12月31日の時計台ジルベスターコンサート2016も全3公演全て立ち見が出るほどの超満員で盛会となりました。

上記の演奏機会の他にも沢山の沢山の演奏ご依頼を頂き、愛弟子達や仲間達と共に成長の機会を頂きました。すべての演奏会に思い出が溢れ感謝の言葉でいっぱいです。

2017年の今年7月6日に、皆様のお陰で念願であったパリ日本文化会館での演奏会が決定致しました。とても光栄なことに在フランス日本大使館の後援も決定し、北の縄文文化をパリで発信出来ることを心から嬉しく思っております。

先日1月13日には、パリ北海道人会「ポプラ会」新年会で演奏させて頂き、縄文太鼓の輪がパリでも少しずつ広まって参りました。

後援会の皆様の、応援を胸に今年も国境を越えて邁進致します。

本当にまだまだ未熟な表現者では御座いますが、2017年も皆様からお声掛け頂く演奏機会の一つ一つを愛弟子達や仲間達と共に全身全霊で打ち抜き、研鑽し、必ず更に更に喜んで頂ける表現者になります。

2017年もどうぞ、ご指導ご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様にとって佳い一年でありますよう御祈念申し上げます。

2017年1月吉日

ジャンベ 縄文太鼓演奏家 茂呂剛伸

今年も多彩な活動を予定・計画しております

■演奏会

- ・パリ北海道人会「ポプラ会」新年会(1月13日)
- ・北の縄文道民会議「道庁赤レンガ・縄文雪まつり」(2月11日開催決定)
- ・茂呂剛伸後援会総会・3周年記念公演(4月1日開催決定)
- ・ユネスコ世界文化遺産候補縄文遺跡群 秋田・岩手の各遺跡巡り(4月～)
- ・フランス パリ日本文化会館 縄文太鼓演奏会(7月6日開催決定)
- ・札幌芸術の森 登り窯演奏会(9月下旬予定)
- ・第8回「駱駝の瘤にまたがって」渡辺淳一文学館公演(10月8日開催決定)
- ・第5回 コンテンポラリージャンベコンクール (12月9日開催決定)
- ・第3回 札幌時計台大晦日カウントダウンコンサート(12月31日予定)

2017年はユネスコ世界文化遺産候補縄文遺跡群を全て巡り終えることが出来ます。各遺跡で採取した土で縄文太鼓を作り、個展や演奏を行いたいと思っております。個展や演奏の企画が決まりましたら、随時発表させて頂きます。ご期待ください。

■指導等

- ・道新ジャンベ教室 師範 石田しろ(イース札幌)
- ・プライベートレッスン教室 師範 澤口勝・佐藤夕香(イース札幌)
- ・医療法人しもでメンタルクリニックデイサービス音楽療法講師 茂呂剛伸・石田しろ
- ・地域活動支援センター まる商なはは ジャンベクラブ講師 茂呂剛伸・石田しろ
- ・島牧村中学校縄文太鼓卒業制作指導 澤口勝
- ・円山陶芸工房(北海道陶芸協会)縄文太鼓制作教室 澤口勝

2017年は医療教育福祉の現場にて演奏及び演奏体験の機会を増やし、指導者の育成にも更に力を注ぎます。

これからの会報発行予定

いつもご愛読下さりまして、ありがとうございます。本誌は今年も年3回の発行を予定しております。今後も茂呂剛伸の活動、親交のある方々との対談などを通じてより充実した内容を目指してまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。

■vol.06…2017年5月下旬発行予定 ■vol.07…2017年9月下旬発行予定 *内容・発行日は変更となる場合がございます

*バックナンバー(vol.01～04)ならびに英語版(vol.01～03抜粋)・フランス語版(vol.01・03合併号/vol.02)をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足したのが「茂呂剛伸後援会」です。

本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。

【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com *茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください

Goshin Moro
Supporters Club
News Letter

茂呂剛伸後援会 会報 第5号
2017年1月31日発行

発行者 茂呂剛伸後援会事務局

発行所 茂呂剛伸後援会

064-0804

札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階

株式会社オフィスマロ 内

デザイン ウリュウ ユウキ(クリエイティブワークス19761012)

TEL 011-200-2112

FAX 011-200-2113

moro-t@mirai-t.com

www.goshinmoro.com